

[依頼論文]

コーパスと『100語』が教えてくれたもの
—基礎語彙の英語学習における重要性—

投野由紀夫 (明海大学)

A Corpus-Based View of L2 Basic Vocabulary

Yukio TONO (Meikai University)

キーワード: コーパス, 学習基本語, 語彙習得 第2言語習得

Keywords: corpus, basic vocabulary, vocabulary acquisition,
second language acquisition

SUMMARY

This paper is a rather informal summary of the invited talk I gave at the KELES 2006 Conference. I will discuss the importance of basic vocabulary in English and demonstrate how a corpus-informed view of basic vocabulary helps language learners focus on the core knowledge of the target language. I will also argue that vocabulary learning should be designed in such a way that one should learn core and peripheral vocabulary in different methods.

1. コーパスと『100語』と私

1. 1. コーパスとの出会い

コーパス (corpus) とは実際に使用された言語テキスト (書かれたものや話されたもの) を目的に応じて一定の科学的な方法で標本抽出しコンピューター処理できる形式に収集した言語データベースである。私は大学時代の趣味は「辞書収集」であった。大学3年時点で、300から400冊くらいの英語辞書を所有していた。すべて古本屋などで買いあさったものである。自分は集めるのが趣味であったから、1987年 (大学院在籍時) に COBUILD の英語辞典初版が出版され、「数千万語の実際に使われた英語テキストを集めて、それをコンピューター分析して作った」と聞いた時に背筋がぞくぞくとしたのを今でも覚えている。それ以来、英語教育の関連分野として

辞書編纂や辞書学に興味があった自分は、90年代前半に欧州のコンピューター辞書学セミナー (COMPLEX, Euralex など) などに相次いで参加し、コーパス利用の動向を身をもって感じた。同時に、英語教育分野でこのテクノロジーを利用する有効性を感じ、1992年ごろから英作文データをもとに「学習者コーパス (learner corpus)」の本格的な作成に取り組んだ。このへんから「コーパス言語学」をかじっているだけではダメだと感じ、一念発起して勤めていた大学を辞め、3年間英国ランカスター大学言語学科博士課程でコーパス言語学を修めた。

1. 2. 空前の語彙ブーム

この10年くらいで言語学・言語教育の分野は空前の語彙ブームを迎えたと言っても過言ではないだろう。言語学は潮流が統語論一辺倒から意味や語用、そして語彙部門 (lexicon) に関心が広がっていき、言語理論も画一的な intuition-based な考え方から usage-based なものが注目を集めてきている。さらに、インターネットなどによる大量の言語情報の利用が出来るようになり、言語資料の考え方は大きく転換を迫られるようになってきた。

言語教育においては、文法中心から語彙中心へシラバスの考え方などがシフトして行った。また第2言語習得研究も単純に統語論中心の第1言語習得の追従だったものから、語彙習得研究などは独自の領域を開拓するようになった。さらに前述の COBUILD に代表されるようなコーパスを利用した英語辞書編纂の躍進、電子辞書やオンライン辞書の普及などの言語教育環境の変化によって、言語資源の重要性がクローズアップされるようになった。

1. 3. 日本にコーパスを浸透させる3つの柱

90年代半ばから私がコーパスの存在を知れば知るほど、これを外国語教育に用いる方法をきちんと考えなければいけない、と思わされた。渡英する前後にアルクの学習語彙表を作成したいという依頼を受けて、コーパスを利用した語彙表作成の指導をした。これが Standard Vocabulary List 12000 という語彙表になる (全体監修は金谷憲氏)。さらにこの頃、『現代英語教育』(研究社) に「学習者コーパスと英語指導」という連載を1年間にわたって掲載した (1998年4月~1999年3月)。ちょうどミレニアムを英国で迎え、その頃にさらに1年間にわたって『STEP 英語情報』で「学習者コーパス入門」という連載を行う。これらの連載記事を読んで、中学高校レベルの先生方でコーパスに興味を覚える方々が多く起こされた。

2001年に帰国して、明海大学に勤めることになるが、そこから大きなランドマークとなるような仕事にいくつか関わることとなる。それを3つの柱を立ててまとめてみる。

1. 3. 1. 大規模コーパスの大衆化

「コーパスの英語教育への普及」という旗の下、まず取り組んだのが「大規模コーパスの大衆化」である。このために小学館マルチメディア局とタイアップして、British National Corpus (以下 BNC: 1億語の標準イギリス英語コーパス)のweb検索システムを開発。これを小学館コーパス・ネットワーク (Shogakukan Corpus Network: 以下 SCN) として公開する。後にこのサービスはBNCだけでなく COBUILD の基データとなった WordBanks Online (もと COBUILD Direct といった) という5700万語の英語コーパスも同一インタフェースで公開するようになった。この総合監修も私が担当した。

1. 3. 2 日本の英語教育に活かせる新しいコーパス作り

「コーパスの大衆化」と同時に掲げた目標は「英語教育に必要な新しいコーパス作り」であった。このために American National Corpus (以下 ANC) コンソーシアム設立に積極的に協力した。日本の辞典出版社8社に呼びかけて、ANC のサポートに乗り出した。これはその後、Second Release で2000万語強が公開されている。

さらに、世界最大の英語学習者の話し言葉コーパス NICT-JLE Corpus の構築を提唱したのも私である。当時、アルクに眠っていた Standard Speaking Test というインタビューテストの音声データを聞いて、「これをコーパス化すれば世界が驚くだろう！」と考え、1000名以上のデータを書き起こしてくれる予算を提供してくれそうな工学系の研究所を探しているところに、通信総合研究所(現在の情報通信研究機構)の自然言語処理チームが協力してくれることになり、1200件以上、約200万語の世界最大級の話し言葉学習者コーパスが完成するのである。

これと並行してずっと私が取り組んでいるのが、JEFLL Corpus という日本人英語学習者による英作文コーパスである。中学1年～高校3年までの約1万件の作文データを収集している。これも現在、プロジェクトは締めくくりの時期になってきており、1万件のデータの公開に向けて整備を行っている。

もう1つ世界があつと驚くコーパスとして Professional English (専門英語) のコーパス構築も担当した。これは Professional English Research Consortium (PERC) という産学協同の研究団体のコーパス構築部門での仕事で、特に科学技術英語の学術論文コーパスを全件著作権処理を行って研究用に公開する、という偉業であった。これは既にほぼ完成し、前述の SCN で公開する方向で整備中である。

1. 3. 3. コーパスを利用した英語教育の教材開発

3点目は、英語教育においてコーパスから得た情報をどう実際の教材や指導法に活かすか、ということの実践である。まず、2000年くらいから始まっていた大学英語教育学会 JACET4000 の改訂作業がある。それまでの JACET4000 もいろいろな学

習語彙表を総合的に扱ったよい成果であったが、今回は徹底したコーパス利用を行った。そのために、BNC lemma list の紹介、log-likelihood を用いた語彙表比較の分析手法を研究班に提案し、JACET8000 作成の際のコーパス利用の基盤を作った。

そして教材開発の最も象徴的な例がNHKの英会話プログラムの作成である。NHKは2003年のテレビ語学プログラム全面改訂の目玉として、「ラジオのように毎日学べるテレビ英会話」を目指した。1週間に10分×4回、年間100回というプログラム回数が多い形式に対して、私の「コーパス準拠の語彙中心シラバス」はぴったりだった。

『100語でスタート!英会話』は、幸い大変好評を博し、新年度4月号が店頭で品切れになるなどのブームとなった。CGキャラクター「コーパス君」の登場もあり、「コーパス」という専門用語がすっかり一般大衆に浸透して行ったのであった。

2. コーパス分析による基礎語彙の特徴

コーパス言語学の解説は私の入門書(投野2006; McEnery, Xiao, & Tono 2006)をご参照いただくとして、ここではコーパスを利用した『100語』という特色ある英会話番組を3年間担当して、「基礎語彙」ということを考える機会が多くあったので、「基礎語彙」の特徴とその重要性、語彙指導や語彙学習への示唆、などについて私見を述べてみたい。

2. 1. 会話コーパス上位100語の分析

私が『100語』を作る時にまず直面したことは、キーワードの100語をどのように選定するかということであった。BNC1億語のうち1000万語の会話データを使って、まず頻度リストを作成。そこから約5万7千語のリストが出来た。この5万7千語は「異なり語(type)」と言って、例えば何万回も出てくるaやtheなどは1語として数える。この5万7千語のうちのトップ100語、一番よく使う100語を選んだ場合、この会話コーパス1000万語のうちのどのくらいをカバーすると思いだろうか。実はなんと異なり語5万7千語のうち、「上位100語で67%」を占めてしまう。言い換えると、1000万語の会話のうちの7割弱が、100の単語で成り立っているということである。これは予想以上に多いと言えよう。非常に頻度の高い一部の単語が、繰り返し出現するという傾向が言葉にはあるということなのだ。

つまりこれは英会話で使う主要な単語は、全て中学校で出てくるような単語である、ということでもある。基本100語をしっかりと使いこなせば、日常会話の約7割はカバーしてしまう。案外少ない言葉でいろんなことを言っているということである。これがまず注目すべき第一の言葉のデータの的な特徴である。

次に、これは少々難しいが、会話に使われる単語で一番よく出てくる「100語の品詞」を想像してみたい。どの品詞が一番多いだろうか。内訳を図1に示す。

単純集計すると、動詞が17個で一番多い。この17個は我々が知っているような基本動詞がほとんどである。その次に多いのは、代名詞と前置詞で12個。副詞も15個と多く、up、way、then や there などを含む。意外と少ないのが名詞である。名詞は100のうち4つしかない。これを見ると、一番よく使う単語というのは、名詞のような内容語はあまり含まれてこないことがわかる。むしろ、文の骨組みを作る動詞、それから代名詞、前置詞、副詞のような、「機能語」的なものだ。文法のコアになるようなものが多いというわけである。

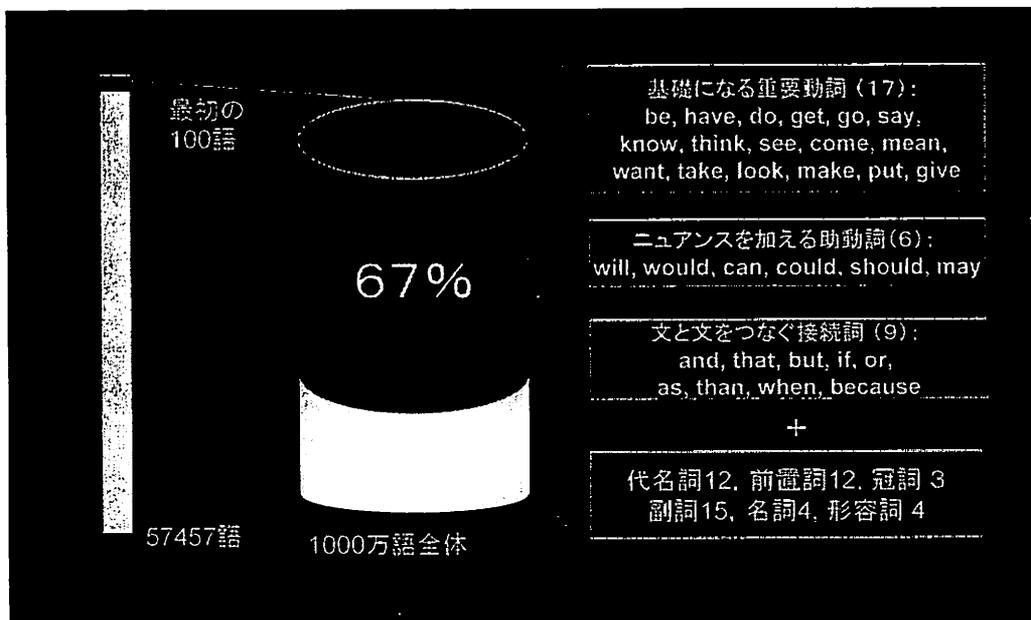


図1：100語の品詞内訳

これ以外に興味深いのは、ニュアンスを加える助動詞が6個も入っている点である。この助動詞を見ると、will、can、may 以外に、would、could、should なども入っている。これは案外、日本の中学校だときちんと指導しないのだが、could や would などの法助動詞は丁寧表現や予測したりするような際、少しぼやかして言ったりするような際に多用する助動詞だ。

また接続詞も9個も入っている。1文ずつボツボツ話すのではなく、こういう接続詞で文と文をつなげて、自分の言うことを拡充していく使い方が会話ではとても重要だということを示している。このように見てくると、100語と言ってもその中には我々が中学校で教えているけれども、あまりきちんと扱っていないようなものも結構含まれていることがわかるだろう。会話の素になっているような語彙の要素を考えると、こういう助動詞や接続詞が案外重要だということを入れておくとよい。まとめると、会話の67%を占める上位100語は、「動詞+文」の骨組みを作る機能語であるから、まず「文の骨格を決める動詞」と「会話を組み立てる機能語」をマスターするのが非常に重要だということがわかっていく。そのメリハリが、自分の中でできてくると、

また英語のとらえ方も変わってくるのである。

2. 2. 上位 2000 語までの分析

では、100 語から先はどうなるのであろうか？ 試しに、先ほどの会話データの 90% ぐらいをカバーするには、何語あればよいか、調査してみた（図 2 を参照）。

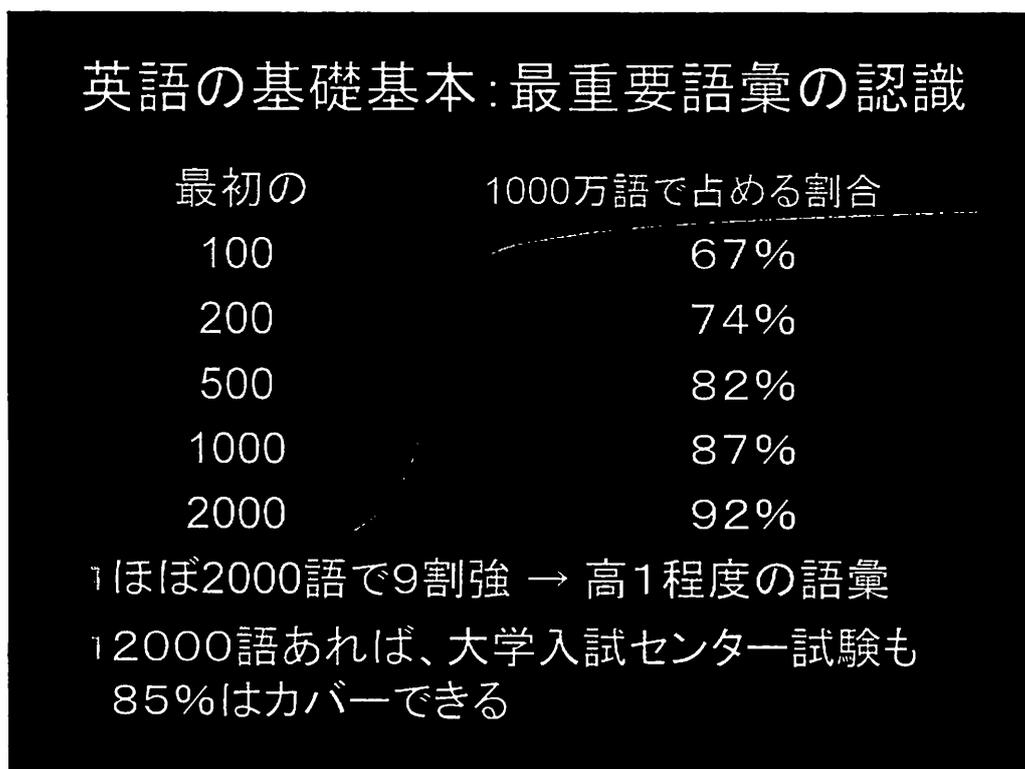


図 2 : 2000 語までの会話カバー率

同じ BNC1000 万語のうち上位 200 語で 74%、上位 500 語だと 82%、1000 語だと 87%で、実は 90%を超えるには上位 2000 語の単語程度が必要になる。こうやって見ると、100 語まではかなり急激に上昇するが、その後は少しずつ緩やかな上昇線を描く。ほぼ 2000 語で 9 割強である。この辺りの語彙は、高校 1 年生ぐらいで習う語彙であるから、高校 1 年程度で大体会話の 9 割ぐらいを占めてしまう、ということになる。そして統計データによると、2000 語あると、ニュースに出てくるような英語の 85% ぐらいもカバーできてしまう。2000 語というのは、けっこう英語が形になってくるようなレベルといえる。しかし、最初の 100 語で割合がぐんと増えるのだが、その後は 200、500、1000 といっても、少しずつしか上がらない。これは「ジップの法則 (Zipf's Law)」といって、ものすごく少数のものが全体を占めてしまい、その後その数を増やしていくと割合はあまり上がらなくなってしまうという、言語の語彙分布だけでなく、社会事象全般の傾向にも当てはまることが知られている。であるから、この最初の 100 語は、機能語を中心に文法的な役割を果たして何度も頻繁に出現するけ

れども、そこから先はあまり急激には増えなくなってしまう。その心はというと、文法的な単語が最初の100、200ぐらいに集中していて、あとはどんどん内容語 (content word: 名詞、形容詞など) になるということ。であるから、この2000語のレベルの頻度分析をすると、興味深いことに2000語の約半分は名詞だということが判明する。100語レベルだと名詞はたったの4個、つまり100語だと名詞が4%しかなかったのに対して、2000語ぐらいまでになると50%が名詞になってしまう。であるから、2000語程度を覚えている人というのは、約1000の名詞で、いろいろな内容に応じた単語も徐々にトピックに応じて言える基礎的な力がついてくるのだとわかる。そして、高校1年程度の教科書に出てくる言葉を超えていくと、英語の本当の力がグッとついてくるようになるわけだ。2000語を読むぐらいから、テキストのカバー率が安定して8割弱ぐらいになる。であるから、会話や基礎的な英語力の基準値として2000語というようなことがよく言われるのである。例えば、ロングマン等の英英辞典は、約2000語の定義文で書かれているが、これは2000語ぐらいで何となくいろんなことを言い換えて表現できる基礎的な力がつくということの証左だ。我々も、この2000語が自由自在になっているかということ、一つの自分の英語力のバロメーターにしたい。

3. 語彙の特徴をとらえた学習法

我々は普段、単語をどのように勉強しているだろうか。受験勉強で単語帳をひたすら暗記したという人もいるかもしれない。それから今、いろいろな種類の単語集が出ているが、それらを利用している人もいることだろう。ここでは、単語学習のコツについて、先程のコーパスでわかったことを元に、少し考えてみたい。

3. 1. 語彙学習の良いイメージ、悪いイメージ

まず、これはよく私が中高の生徒達や先生の研修会などで話すことであるが、単語学習の典型的な悪い例は、単語が一律全てマスに入っているようなイメージだ。ここが終わった、ここも終わったという感じで、マスを一つ一つ塗りつぶしているような感じである。このイメージで単語を勉強している人は、重要な単語とそれ以外の単語の区別がついていない、みんな同じマスに入っているように見える、というような感じである。これだと方法も一辺倒なので、学習効果も半減してしまう。英語力の鍛え方は、こういうマスの発想ではダメである。どちらかというと、「木」のような発想のほうがいい。どういう木かということ、図3のようなイメージである。

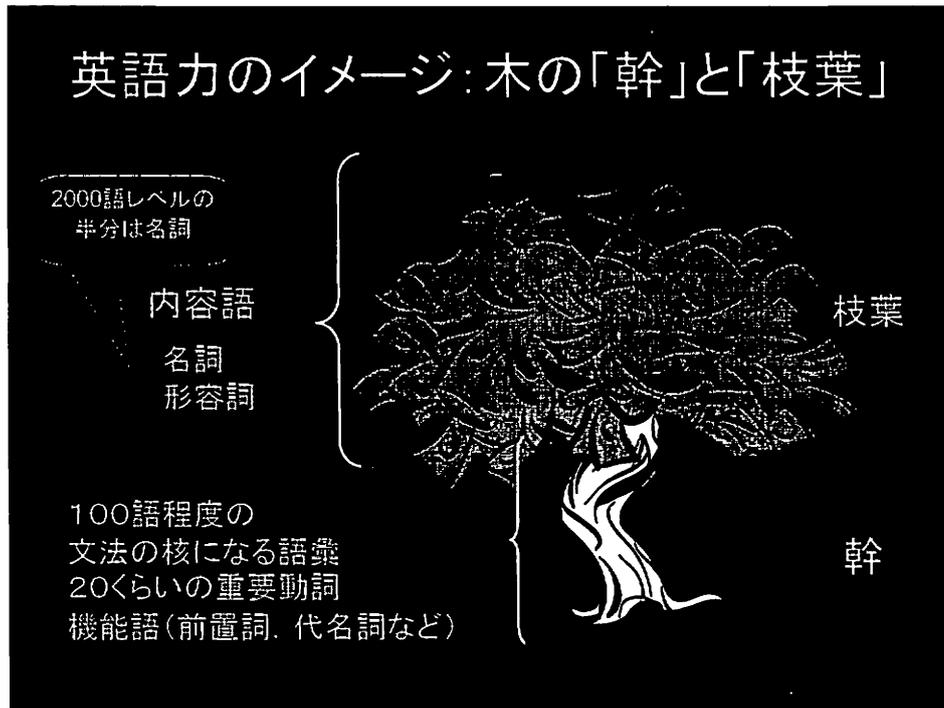


図3：英語力のイメージ

説明したように、英語の土台になるような部分は、この幹のようなものを構成する語彙なのである。会話で7割を占める100語ということ述べたが、この幹の部分は100語程度の文法の核(コア)になるような語彙(動詞など)、および機能語類からなる。それから他の枝葉になる部分は、フサフサと豊かに繁って欲しいわけで、そこは名詞や形容詞のような内容語にあたる。であるから、こういう枝葉の語彙と幹の語彙では、学習法を分けなければならない。そういうイメージを、まず我々は持つべきである。

3. 2. 「単語を知っている」ということ

ここまで来て、これらの100語などは既に意味も知っていて勉強するに足りない、という人が出てくるかもしれない。では、「単語を知っている」ということは、どういうことなのだろうか。そのことを、少し考えてみよう。例えば動詞の have。これは be 動詞の次に頻度が高く、どんなコーパスでもトップ10に必ず入ってくる重要動詞である。have は誰でも知っている単語といえよう。Have は後ろに目的語として名詞を伴い「～を持つ」という意味になる。では、この have の後ろに来る名詞で、ネイティブ・スピーカーがよく使う名詞はどんなものがあると思われるだろうか。こういふと I have a pen. のような文がすぐ浮かんでくるかもしれないが、I have a pen. ではもちろんない。これを中高の英語教員研修などでよく話題にするのであるが、5つのうち3つ当たれば、かなり英語の感覚が鋭い人だと言える。断っておくと今回お示しするのは前述の BNC 話し言葉セクションを基にしているから、イギリス英語だということをお断りしておく。それではトップ5を見てみよう(図4参照)。

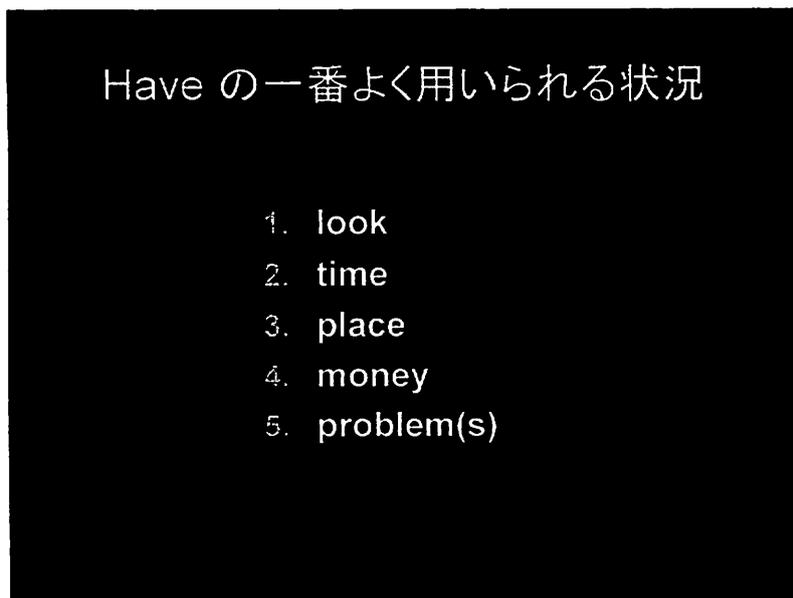


図4 : have +名詞 top 5

まず第5位は、**problem** だった。これは **have a problem** で「～は問題がある」ということ。それで「困ったことになった」という意味になる。例えば **I have a problem with my bike.** と言えば、「ちょっと自転車の調子が良くない」、**I have a problem with my PC.** なら「パソコンの調子が悪い」というように使う。**Problem** という言葉は比較的日常的な会話でもよく出てきて、小さな子供でも使うのである。第4位は **money**。お金があるとか、ないとかということを使う。第3位は **place** で、行く場所があるとか、どういうところに用事があるとかいう時に使う。第2位は **time** で、これも時間が十分ある (**have enough time**) とか、時間がない (**have no time**) という時に使う。第1位はイギリス英語ということもあって、なかなか想像つかなかったかもしれないが、正解は **look**。これは **have a look** というフレーズで、この **look** は動詞の名詞形。アメリカ英語だと「**take a look**」という方が多いかも知れないが、イギリス英語だと **have a look** という言い方で「見る」という意味になる。

この手の単語のリストを整理すると、案外面白いことがわかる。「**have** の顔を知る」ということである。(図5参照)

Have の「顔」を知る

- have の基本的意味: 「持つ」
- have の後ろに来るもの:
 - 目に見えるもの: money, children, hair
 - 時間・場所: time, place, chance, opportunity
 - 経験: difficulty, problem(s)
 - 考え: idea, interest
 - 仕事: job, work
 - 動作: look(見ること)

(注) 意外と抽象的なものが多い

★ have は中1で出てくる動詞だが、一番よく使われる用法は案外身についていない

図5 : have の「顔」

have は「持っている」という意味だが、後ろにくるものを見ると、money, children, hair など、比較的目に見える具体的なものはランキングの 20 ぐらいにごく小数しか出てこない。教室環境では I have a pen. で導入するが、教室から一步出て、実際に会話で have を使おうとすると、目に見えるものを目的語に持つのは案外少なく、「時間や場所」(time、place、chance、opportunity)、「ある種の経験」(difficulty、problem)、「考えや興味」(idea、interest)、「仕事」(job、work) というようなものが多い。また第 1 位だった have a look タイプの have が軽動詞の用法 (have a chat など) が出てくることが多い。

3. 3. 「深さ」を意識した語彙指導

このように「I have～」という「何か持っています」というのもう卒業だ、と思うかも知れないが、実際の日常会話でネイティブ・スピーカーは have に関してもっと進んだ、深い使い方をしているのである。そういう意味で、表面的に「持っている」というのを知っているだけだと、中学レベルの最初の have で知識が止まってしまっていて、そこから語彙知識に深みがない。進化しないまま、大学生になってしまったなどという人も多いのだ。であるから NHK の『100 語』を放送した時に、このようなキーワードのコーパス・ランキングを見ると、「これはあまり知らなかった」と、視聴者が新鮮に感じてくださったわけだ。Have は中 1 で出てくる基本動詞であるが、一番よく使われる用法、つまりネイティブのような使い方の have を極めるには、まだ何ステップか学習を深めていかなければならない。

指導法的に言えば、導入時の語彙指導で、I have a pen. は、それはそれでいい。け

れども教室環境での使い方から、徐々にステップアップしていくような指導を、こういう基本語彙について、きちんとしなくてはいけないのに、そういうことをきちんとしないから、高校や大学に行っても、相変わらず I have a pen. 的なレベルで留まっている。そして have は何万回も何十万回も会話で出てくるのに、あまり自分では have を使った表現を使えなかつたりする。そんな意味で、当たり前の単語だと馬鹿にせずじつくり深く学ばなければならない語彙もあるのだということを、ぜひ教師は確認すべきなのである。

まだ世界的に見ても、英語教科書できちんと基本語が手当されており、導入からレベルが上がると用法がターゲットのネイティブの用法にまで自然に進化していくような語彙中心シラバスのテキストは、未だに作られていない。そのような意味でコーパスデータを見れば、こういうところを基本語でしっかりカバーすべき、というところがわかってくるわけである。それで、I have a pen. から進んで、こういうフレーズをいろんな形で使いこなせる練習を、きちんと仕込んだような教科書が出てこない、100語で会話の7割と言っても、その100語の使い方が非常に深いわけであるから、その深い部分をきちんとやるようなトレーニングができないまま中学高校と行ってしまふことになる。「何をどこまでやればいいのか」という点に関して、辞典を見て全部丸暗記しろと言ってもそれは無理なので、コーパスが学習内容の重要度基準を示すのに非常に威力を発揮するところであろう。

私の『100語』では、このような視点から100の単語を選ぶだけでなく、その100の単語が抱えているいろいろな特徴をコーパス分析した結果、教材化している。私は1分間しか出演せずに目立たなかったが、プログラムの内容やテキストは全面的に私が執筆した。恐らくそのへんの語学テキストの中で、データに基づいたという意味では一番凝った作りだと自負している。

例えば show という動詞を例にとると、これも2種類の情報を切り出している(図6参照)。一つは show の動詞の直後に、どのような文型パターンが来るかというコロケーション (collocation) を抽出している。「show+名詞」と「show+人+名詞」では、「名詞」の位置にくる単語の種類が違う。例えば、直後に間接目的語で人が来ると次の名詞は video など実際の具体的なものが来ることが多いが、show の後ろにいきなり名詞が来る場合には、もっと抽象的なもの(例えば show evidence、show respect、show interest など)が来る。つまり、文型パターンがわずかに違うだけで、後ろに来る名詞のパターンががらりと変わる。そんなことはデータを見ないとわからない。単に「show+人+名詞」と覚えてもダメなのである。

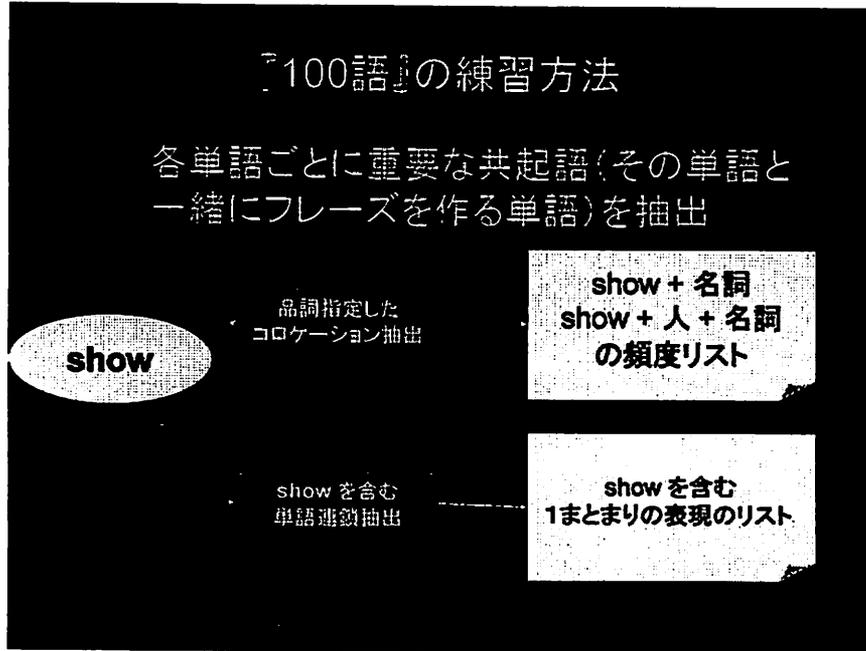


図6 : show から切り出すコーパス情報

もう一つは、show を含む単語の連鎖。例えば show というのを含んだ2語とか3語とか4語とかの連鎖の切り出しだ。こういうのを専門的にはクラスター (cluster) というが、そういうクラスターを出した情報を元にデータを作るわけだ。図7は show を元にした名詞のリストの例。

No.	頻度	係	語句
1	11	0.44	I'll show you how
2	10	0.40	I'll show you .
3	10	0.40	I'll show you what
4	6	0.24	is now showing . let
5	5	0.20	has been shown to be
6	5	0.20	I'll show you .
7	5	0.20	I'll show you the
8	4	0.16	has now showing . let
9	4	0.16	I'll show you a
10	4	0.16	I'll show you it
11	4	0.16	I'll show you one
12	3	0.12	favour please show and the
13	3	0.12	I'll show it to
14	3	0.12	I'll show you in
15	3	0.12	I'll show you that
16	3	0.12	I can show you .
17	3	0.12	if you show me a
18	3	0.12	is now showing . thank
19	3	0.12	it just shows you how
20	3	0.12	let me show you

図7 : show のクラスター

図7は私が監修している小学館コーパス・ネットワークの機能の一部であるが、これで先程のコロケーションデータを出し、かつ、show の前後に来る名詞のパターン、また I'll show you how のように5語の連鎖を出すことが可能だ。(注：I'll はここでは2語にカウント) このようにクラスターを抽出することによって、例えば I'll show you how というような言い方がよくされるという情報を取り出すことができるわけだ。

まとめると、「幹になる単語は使いこなしが大事」。だからじっくり深く学ばないといけない。内容に関する単語に比べると、幹の単語は練習も大変だし、長い時間をかけて身につけなければいけない。だから今でも have の使い方が十分でない人がたくさんいるはずだ。そういう人は、会話の中での have を少し意識して、基本語だからもう少しきちんと勉強するようなトレーニングが実は必要である。何度も出会い、何度も練習し、単語のいろんな使い方と顔見知りになるこ

と。コーパスを使った英語教材もそういうトレーニングの役に立つはずである。

4. 枝葉を作る単語の学習法

最後に、枝葉を作る単語の学習法の話をしよう。この葉っぱは、前述したように幹の単語とは違って、葉はたくさん増やさなければいけない。最低 2000 語で会話の 9 割だが、読むためにはやはりもっと必要になってくるであろう。2000 語以上のレベルの単語は、見て意味がわかればいいものになる。例えば、大学入試を経験した人は、大学入試レベルの単語だと、恐らく 2000 語ではあまり読めないという感じがすると思う。3000 語、4000 語ぐらいだと、いろいろなテキストを読んだ時に、推測したりしやすくなっていく語彙量である。そこで最初、2000 語以上の「枝葉」を増やすためには単語帳方式で、1対1で覚えるのもいいと私は勧めている。1対1で覚えるというと、「昔風の覚え方ですね」と言われるかもしれないが、やはりそれにも段階があって、最初は意味だけでよく、見てわかればいい。しかし 2000 語レベルがマスターできるような段階になったら、徐々に 3000 語レベルでも発表語彙として使用できるようになるために、受け身的な語彙（いわゆる *passive vocabulary*）から、自分で使いこなせる語彙（*active vocabulary*）に転換していくようなことを、少しずつしていくのである。入口は1対1でも、その後の手当てをしていけば大丈夫だということだ。

ただ、たとえば将来塾講師や家庭教師をする人は覚えておいて欲しいのだが、1対1で覚えさせたりしていると、これは丸暗記になる。丸暗記は忘れてしまいやすい。そうすると、やり方をちょっと工夫したほうがいい。語彙指導のいろいろな研究がなされているが、記憶のメカニズム的に言うと、短期間で繰り返すよりも少し間隔をおいて年に5、6回復習するようにしたほうが効果的。例えば、試験の1カ月ぐらい前に、集中的に繰り返しやったりする人がいるが、そういう覚え方よりも、もう少しインターバルをおいて触れる方が効果が高い、と研究では言われている。つまり短期集中型で一夜漬けのように覚えても案外忘れてしまう。そうではなく、むしろもう少し長いスパンで、同じようなセットを繰り返しやる方がいい。だから単語集を学校でやっている中高の先生にも、よく私はこういうアドバイスをするのだが、その1冊の単語集を1年間で1回だけやるような方法は勧めない。そうではなくて、その単語集を1学期で1冊終えてしまい、2学期でもう1回、3学期でもう1回やるような感じのインターバルの置きかたのほうが、語彙を覚えるのにはいいのである。これを「リハーサル効果」と言う。何か自分で語彙を増やしたいとか、資格試験で点をとりたいと思う人は、単語に繰り返しインターバルをおいて出会うほうがいい、と覚えておこう。

4. 1. ブレイン・ストーミング・マッピング

枝葉を作る単語学習法を私なりにいろいろ工夫しているが、ここでは2つだけ紹介しておこう。1つはブレイン・ストーミング・マッピングという方法。

「ブレイン・ストーミング・マッピング」は新しく出てきた単語と、既知っている単語を頭の中で関連付けて記憶する練習方法だ。脳の中にはメンタル・レキシコン (mental lexicon) といわれる語彙の倉庫のような所があって、単語がどのように格納されているかということに関する研究がいろいろされている。そして単語間には意味的なネットワークが存在すると言われている。例えば「ディズニーランド」と聞いたら人によって思い出すことがいろいろあるだろう。ディズニーランドに行った時の楽しい経験や、夜見た花火とか、お土産とか、恋人とケンカしたこととか、さまざまな記憶を思いおこすかも知れない。そういう経験というものは人間誰にでもあって、ある単語や何かから様々な記憶や経験、そして関連するようなものが脳の中に連鎖されている。同様に言葉も「ディズニーランド」→「舞浜」→「浦安」→「明海大学」(という連想をする人は少ないと思うが…) ネットワークがある。そういうネットワークの中に、新しい単語を取り込むような操作をする練習方法なのである。

ブレイン・ストーミングは、特に決め事をせずに自由に頭の中で発想したことを出し合うような議論のこと。これを単語学習にも使ってみようというわけだ。そしてマッピングというのは、単語から連想するものをいろいろ書き出す方法である。例えば自分のトレーニングのために1日1本ぐらい英字新聞の記事を読んだとする。その中でちょっと気になった単語があると、まず辞書で引いてみる。そして単語の重要度を確認してみる。自分が知らないようなランク、例えば3000語ぐらいでも重要な単語だという印がついていた場合、これは覚えたほうがよい。そこでその単語をピックアップして、それを元に、次のようなことをする(図8)。

まず、真ん中のところにその単語(例えば storm)を書き、その単語から想起する単語を何でもいいからどんどん書き出すようにする。例えば rain、wind、thunder などの単語を書く人がいるかも知れない。あるいは、heavy storm のように形容詞を思い出す人もあるだろう。このように、とにかく思い浮かぶものをたくさんマッピングしていくうちに、自分の知っている既習の単語とターゲットになる単語 storm を思い浮かべる経験が積み重なっていき、頭の貯蔵庫(メンタル・レキシコン)に関連づけながら格納されていくのである。なお、このタスクにあまり時間をかけ過ぎてはいけない。せいぜい数分で集中してやるとよい。例えば、電車の中でレポート用紙か使い古した紙の裏に、10個か20個ぐらいでも、書きなぐってみたりする。こうすると、案外他の単語と一緒に、その単語を覚えている。「storm=嵐」というように1対1で覚えるよりはずっといい。是非試してみたい。

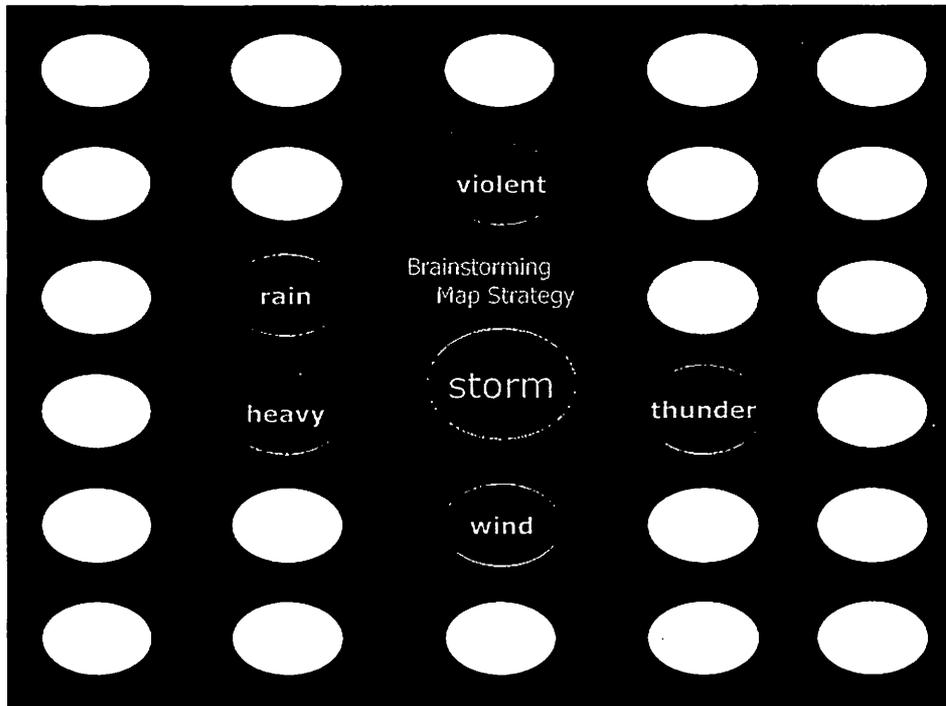


図8 : Brainstorming Mapping の例

単語を思い出す時には、2通りの思い出し方がある。storm-rainのような、同義語的な連想。これはパラディグマティック (paradigmatic) という。そういうパラディグマティックな連想と、storm-heavyのような横の連結的な発想、これをシンタグマティック (syntagmatic) というが、その両方を使って、単語を取り出す練習をするとよい。

4. 2. ワード・フォーク

もう一つはワード・フォークという練習方法。図9を見て欲しい。ワード・フォークはどちらかという、プロダクティブに覚えた単語をもっと使いこなすために役立つ練習方法だ。コロケーション (単語と単語の連結) をモードにして関連の語彙を整理していくやり方で、例えば、ある名詞を覚えると、それ単体だとつまらないので、その名詞がどんな形容詞と一緒に使われるか、あるいは動詞だったらどんな目的語と一緒に使うか、を整理していくわけだ。つまりいろいろフレーズを作ってみて、セットで覚える方法といえよう。なぜワード・フォークと言うかという、練習するタスク・フォームがフォークの格好をしているからだ。

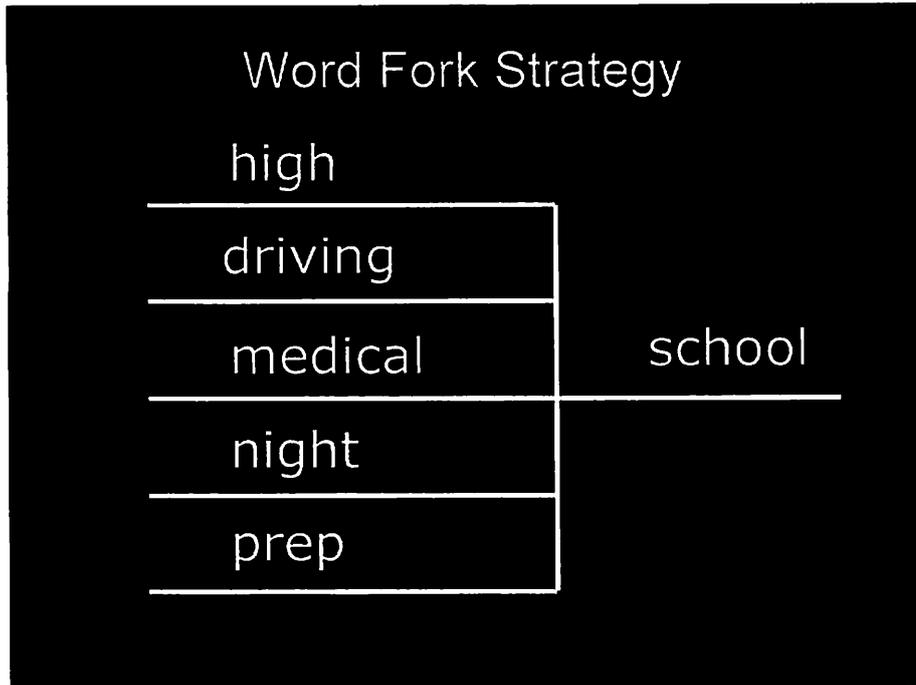


図9 : Word Fork Strategy の例

これは Michael McCarthy 等の語彙研究のテキストにはよく出てくるので、私の専売特許ではない。図9にあるように、school という単語を書いておいて、school の前にくるいろいろな単語を想起させて「～school (～学校)」というフレーズを考えさせるわけ。そうすると、ぱっと出てくるものもあるが、「あれっ、あの〇〇学校って、英語では何というのだろう？」と日本語では浮かぶのに英語だとつまってしまうものも出てくる。そういう時に、和英辞典でチェックするといったことを一緒にやってみるわけだ。例えば図9の例に示すように、high school 以外に driving school (自動車学校)、medical school (大学の医学部)、night school (定時制) など、あまりすぐに school の種類で出てこなかったりするものもあるだろう。このように最初は英語で思いつくものを書けるだけ書いて、その後、どうしてもわからない日本語で浮かんでくるフレーズを和英辞典で調べてメモしておいたりすると、こういった総合的な体験がフレーズのセットで覚えることや、新しく和英辞典を引いて覚えた学校の種類などの英語フレーズの定着に貢献するのである。

このフォークの向きを逆にして、school の場合、school teacher、school uniform、school building など、school+名詞の複合語を考えさせる。すると、例えば「学則って何て言うのかな」とか自分で考えた時に、わからないことが出てくる。そういうものを和英辞典でちょっと調べて school regulation などという普通だと難しいと感じるようなフレーズが整理できたりする。

こういう語彙の活用度の高い整理の仕方をしておくと、一つの単語を覚えながら、そこからどんどん広げていくということができる。英語力の木のイメージを再度思い

出してみよう。枝葉の部分はこのような感じで、どんどん繁らせる工夫をしないといけない。こういった語彙学習の方法を上手く使い分けて勉強していくと、幹は幹でしっかり太くなるし、かつ枝葉もフサフサ茂って姿の良い木になる、と思うわけである。

5. おわりに

この小論では、私のコーパス言語学研究の応用として英語教育の教材開発で得た知見、そして英語語彙学習へのヒントを紹介してきた。『100語』の後、「コーパス」という言葉は市民権を得た。教員研修などでも「コーパスで何か話して欲しい」「具体的なコーパスの使い方を教えて欲しい」という要望が増えた。またコーパス言語学研究の裾野も広がってきたといえよう。

日本国内ではコーパス言語学はずっと関西の方が活動の中心であった。現在も大阪大学、立命館大学など、コーパス言語学に強いスタッフを集めている研究機関があるのも関西である。この関西英語教育学会の発展のためにも、関西のコーパス言語学の研究者たちが、英語教育現場にどんどん知見を還元させて、素晴らしい共同研究の実が結ばれ、そしてそれが日本の英語教育を変えていくようなビジョンを関東人として期待しながら筆を置きたい。

参考文献

McEnery, T., Xiao, R. and Tono, Y. (2006) *Corpus-Based Language Studies: An Advanced Resource Book*. UK: Routledge.

投野由紀夫(2004)『コーパス練習帳』 東京：NHK出版

投野由紀夫(2006)『コーパス超入門』 東京：小学館